

儀礼行為としての「笑い」

— 電話会話にみられる笑いを手がかりとして —

笹川洋子

要旨

最近の笑いの研究動向として、相互作用に位置づけて笑いをとらえ直すという試みがあるが、現段階での研究例は少ない。このような笑いを明らかにするには、さらにどのような場面で、どのように笑いが起こるかを観察する必要がある。そこで、本稿では電話会話に現れる462の笑いの場面をデータとし、笑いの役割を探る試みを行う。データの分析にあたって、以下のように分析の範囲と分析視点を措定する。まず、笑いを自分の感情をありのままに表現する「自己開示」の笑いとし、印象操作を意図した「自己呈示」の笑いに分ける。しかし、自己開示の笑いは、意図せざる結果であり、本稿の考察目的とする、笑いがどのように対人関係に規定されるかという問いをたてることができない。このため、分析対象からはずす。そして、ここでは自己呈示の笑いのみを考察の対象とする。次に、自己呈示の笑いをとらえる視点として、ゴフマンのフェイス・ワークの概念を借用し、笑いを①共感を示しあう呈示儀礼の笑い、②話し手が聞き手のフェイスを脅す意図はないことを示す回避儀礼の笑い、③自己のフェイスを調節する品行の笑いに分類する。さらに、それぞれの笑いについて、会話データを用いて考察を加え、相互行為において笑いが儀礼行為の方略として多様な役割を担っていることを明らかにしてい

キーワード…笑いフェイス・ワーク 電話会話

一 はじめに

私たちの身近にありながら「笑い」は驚くほど多様性に満ちている。猫がとびあがるのを見た時の笑い、自分が転んだ時の笑い、子供や恋人への笑い。そして冷笑や嘲笑。強い恐怖に陥った時でさえ、人は発作的に笑うという。実際に親しい友人から訃報を知らせる電話を受けたことがあったが、いつも冷静なその人の声に低い笑いがかかっていた。またミャンマーの留学生が世話になっていた父親の友人が急死したというニュースを、軽いほほえみを浮かべて伝える場面に出会ったこともある。私たちはおかしさを抑えきれずに笑うが、同時に意図的に笑いをつくり、おかしさとは無縁の状況でも笑うのである。私たちはどのような状況でどのように笑っているのだろうか。

橋元(一九四)は機能から笑いを考察し「その効用が自己完結し相手の存在は副次的なもの(対自機能)と、はじめから他者に対する働きかけが動機となっているもの(対他機能)」に分ける。伝統的な笑い研究では、⁽¹⁾心理的メカニズム等の対自機能に焦点をあて研究が進められてきたが、この視点からでは先にあげた「悲しい時の笑い」を的確に説明することはできない。仮に対自機能の視点から、これを深い悲しみに陥ることを避けるために笑いによって「エネルギーの放出」をおこなない、感情のバランスをとると説明することも可能だが、だとすればこの笑いはどの言語文化圏にも共通しているはずである。しかし異文化の視点からは、悲しい時の笑いは奇異に映るものとして

指摘されることがある。⁽²⁾

日本人の笑いで不思議だと感じるのは、テレビのアナウンサーが人が亡くなったというニュースでも軽いほほえみを浮かべて話すことです。私自身の経験では、私の国はもちろん、他の国でもこのような場面を見たことはありません。日本の文化には慣れたと思いますが、この笑いを見ると、今でも残酷な笑いという気がして、奇妙に感じます。(スウェーデン・女性・ジャーナリスト)

このような笑いは「死という深刻な現実、もしくはそれを被った自分という個別的存在をあえて無化してまでも相手との和合的間柄を乱すまいとする(木村、1983)」⁽¹⁾ 社会的シグナルの役割を果たすと考えられるであろう。しかし対人関係を調節するような笑いの対他機能については研究例が少なく、現時点では十分考察されていない。これは笑いの多様性という特質に加え、笑いを相互行為に位置づける視点が最近までとられなかったこと(水川、1993参照)、また実際の会話データによる笑いの分析が積極的に行われてこなかったという事情による。そこで本稿では「対人関係を調節する笑い」に注目し、相互作用に現れる笑いの意味を探ってみたいと思う。なお、これまで笑いは理論研究の側面から分析されることが多かったが、ここではより日常的な相互作用としての笑いに接近するために、実際の電話会話を資料とした。⁽³⁾ ただし、本稿では笑いを分析するにあたって、エスノメソドロジーとは異なるアプローチをとり、儀礼行為という視点から会話の参与者たちの行為を解釈する。⁽⁴⁾ 以下の節では、まず「笑い」をとらえる本稿の分析視点を示し、次に電話会話データを観察することによって、コミュニケーションにおける笑いを考えるという順序で論を進めたい。

二 笑いをどう考えるか

本節では、まず対他機能の視点にたって、はじめて明確になる笑いがあることを示す。次に自己開示と自己呈示の笑いのうち、本稿の範囲を自己呈示の笑いに限定し、笑いをとらえる視点としてフェイス・ワークの概念を提示したいと思う。

(1) 笑いはどう考えられてきたか—先行研究の中の笑い
 笑いを考えるにあたって、はじめに、本稿では第一義に「笑いは快さの表現である」という点を考えることを確認しておきたい。言い換えれば、優越感の表現、価値無化、フレームの逆転、そして社会的シグナル等で表現される笑いの機能は、快さの表現によって二次的に派生するものであると考える。

それでは、次に相互行為における笑いの意味を探るために、笑い研究の主要なアプローチを検討し、同時に本稿の立場を明確にしたいと思う。先行研究では、①笑いの形態的な違い、②笑いの起こる心理的メカニズム、③笑いの会話構成への関与というアプローチが示されている。

まず第一のアプローチでは、笑いは形態的な違いから、大きく口を開け声をたて、愉快さや喜びを表す快感の表現としての笑いと、社会的挨拶としての微笑みに分けられる。また谷(1987)によると、V・ホーフ(Van Hoof, 1972)は、人間の笑いは「形態的には、口を横に引いて歯をむき出しにする、微笑的笑い(silent beared teeth)と、口を弛緩させてひろげた笑いにみられる笑い(relaxed open mouth)とが重なりあって形成されている」と記している。しかしながら、相互行為における笑いの機能と形態が必ずしも対応しないことは、イヌイットの人々が大きな声で笑いあい挨拶をする例から明らかにする(野村他1984)。

第二の笑いの心理的過程に焦点をあてた研究(H. Bergson, 1900 = 1933: 谷, *ibid.* 他⁽⁵⁾)では、「なぜ笑いが起こるか」

という笑いの起因の解明が目的とされる。例えば、木村(*ibid.*)は「知覚する図式のずれによって、当該図式の現実的リアリティが一挙に脱失すると共に、余剰エネルギーがの放出が相当量の愉快感を生み出す」と笑いを説明する。しかし、同時に笑いの起こるメカニズムだけではなく、他者との関わりという対他機能の視点が必要になる笑いがあることが示唆的に触れられている。

木村が「リアリティキャンセルの笑い」と呼ぶ笑いがそれである。木村は、これまでの笑い研究を整理し、笑いを、純粹な「快感の表現としての笑い」と、現実のリアリティを剥奪無化する「リアリティキャンセルの笑い」に分ける。そして、「価値無下」という視点からは、「概念と実在のズレの知覚」や「神経エネルギーの放出」という笑いの概念装置からは漏れてしまう笑い、すなわち悲しいニュースを伝える時の笑いや、礼儀上の微笑や謙遜の微笑、対決意図を否定する歓迎の微笑等を説明できるとする。これらの笑いは「リアリティ・キャンセルを示す社交的シグナルとなる」という。

しかしながら、この文脈は、相互作用を前提としなければ解釈が難しい笑いがあることを意味するものではないだろうか。すなわち、この種の笑いは自己完結的な視点からではなく、社会的な相互作用において、相手の存在に規定されるという視点から考える方が適切であろう。

最後に第三のアプローチとして、笑いが会話の組織化に「どのように関与するか」という対他機能に注目し、笑いを分析するE.ゴフマン(E. Goffman, 1961 = 1985)、水川(*ibid.*)、西阪(1994)、G. ジェファソン(G. Jefferson, 1979, 1985, 1987)等の研究があげられる。

ゴフマン(*ibid.*)は人々が出会いの場において演じることをやめ、感情の「あふれ出し(Flood out)」が起こる現象について記している。笑いも「あふれ出し」の一種であり、自分を抑え損なった笑いは相互行為上の失策となる。また同時にゴフマンは、自由なあふれ出し、すなわち相互行為を規定する抑制から自由になる「安全な笑い」があ

ることに触れている。ゴフマンはこれを、縛りつけるために使われたエネルギーが開放されると考え、難しい仕事
が終了した時、メンバーの間に解散の合図として笑いが起こる例を示している。

ゴフマンの解釈に対して、水川(Jid.)は「あふれ出し」が、笑い出す限度、抑制できる限度が行為者と状況と
の関係で決定されていく、すなわち相互行為の視点に立ち社会的文脈をとりこもうとするものと評価しながらも、
笑いの分析には笑いが「あふれ出す」ことを前提にする必要はないと指摘する。

例えば、水川があげている話題転換の場面に起こる笑いは、あふれ出しとは別の「トピック移行関連ポイント」
を創り出す会話の装置系と考えられる。また、ジェファソン(一九七〇)は、笑いは「あふれだし」ではなく意図的に
「挿入(insert)」ととらえる可能性を示し⁽⁶⁾、発話を伴っていない時でも「繰り返し+承認」のように特定の発話機
能を代替していることに注目している。さらに、橋元(Jid.)が言及している「仮人称性表示」⁽⁷⁾としての笑い、例
えば自分を低く評価する「謙遜表現」に添えられる笑いも「あふれ出し」では説明できない。

会話分析研究によって、新たな笑いの対他機能が明らかにされてきているが、扱われている笑いはごく一部であ
る。さらに相互行為における笑いの多様性を探るには、まず笑いを整理し、笑いをとらえる視点を定めなければな
るまい。

(2) 笑いをとらえる視点

先行研究では、笑いには、自分の感情をおさえそくなった「あふれ出し」だけではなく、意識的にせよ無意識に
せよ、その効果を意図して創り出される笑いがあることが示されていた。言い換えれば、「あふれ出し」は愉快さ
や快感といった自分の感情を偽らずに表出する「自己開示」の笑いであり、意図的な笑いは快さを儀礼的に示し、
印象操作をもくろむ「自己呈示」の笑いと言えよう。この自己開示と自己呈示の概念は相互行為を前提としており、

有効な概念になると思われる。(8)そこで、この概念を手がかりに笑いの意味を探っていくことにしたい。

しかし、その前に問題を簡潔にするために、本稿の考察の範囲を定めておきたいと思う。結論から言うと、本稿では、自己開示の笑いについては簡単な紹介にとどめ、分析対象としては扱わないこととする。それはこの「あふれ出し」の笑いは、ゴフマンの言うように、演じる行為の停止、意図せざる結果であり、そもそも本稿の目的とする相互行為においてなぜ笑うかという問いをたてること自体できないからである。

場面1は、うさぎは普段はなかず、生命の危機を感じた時にキーキーとなく習性があるという話題から、授業で講師がテープのダビングについて指示した時、いつもは静かな学生達が一斉に抗議の声を発したという話題での笑いである。

場面1 (おかしさを表現する自己開示の笑い) データ134

S1..それから、みんなに渡るように十六本、自分でダビングしなさいって言ったらね、みんなでキーキー

キーって [笑いがかかる+アハハ||1.0秒]

N1.. [笑い(アハハハ)||1.0]

S2..生命の危機感じちゃったの [笑い+ハハハ+h||3.0]

N2.. [笑い(アハハハ+h||3.0)]

この笑いは、相互作用を伴い、強く長く続く傾向が見られる。今回の電話会話データに見られた笑いの多くは、この自己開示の笑いであり、もっとも根源的な笑いと言えるのではないだろうか。しかし前述した理由により、本稿では以降自己呈示的な笑いの意味についてのみ考えていくことにする。同様に、冷笑や嘲笑等の攻撃的笑いは、

多くの場合、印象操作よりも「生地のままの自分を出す」ことが第一義になると考えられるので、自己開示の笑いとし、ここでは扱わない。

それでは、次に、自己呈示の笑いをとらえる視点を検討していこう。先行研究で示された笑いをとらえる視点は、概ね「フレームの逆転」あるいは「社会的シンボル」にまとめることができるが（表1参照）、ここでは「社会的シンボル」の視点を中心に笑いを考えたいと思う。それは「フレームの逆転」という発想では、説明できない笑いがあること、また笑いの性質の違いが明確にできない例が出てくるという理由による。

まず、フレームの逆転の概念では、挨拶で示される歓びの笑いや、既に触れた発話行為となる同意や話題転換の笑いが十分説明できない。仮に、挨拶の笑いや同意は「対決」のフレームを、そして話題転換の笑いは「話題」フレームを崩すというように措定しても、それでもなおフレーム概念だけでは抽出できない笑いの性質がある。例えば、悲しいニュースを伝えるときの笑い、謙遜表現につく笑いは、前者が笑いを添えることで深刻な事態というフレームを回避することから、後者は仮人称表示ということから、共に「フレームを逆転する」笑いということが出来る。しかし、私たちは直感的にこの二つの笑いが相互行為において異なる意味を持っていることを推測できる。悲しい時の笑いは、相手への配慮の表れだが、謙遜の笑いはむしろ自分のための印象操作が優先される。この二つの笑いは別個のものである。笑いの装置を説明する概念としては、フレームの逆転という視点は支持できるが、笑いによって私たちが相互行為で何を行うのかという観点に立たなければ、笑いの意味は見えてこないのではないだろうか。

次の相手に配慮を示す「社会的シグナル」という視点は、この意味で本稿の関心と一致するものであり、自己呈示の笑いを広範に扱える。ただし、社会的シグナルという視点はあまりにも漠然としているので、ここではゴフマン(1965)のフェイス・ワークの概念を借用し、印象操作のための自己呈示の笑いを考えてみたいと思う。

表1 笑いをとらえる視点

自己開示の笑い (不快感の表現)	品行 (自分のフェ イス保護)		謙遜表現 誇示表現		冷笑・嘲笑	(1) 儀礼行為としての笑い (本稿)
	表敬 (相手のフェ イス保護)		回避儀礼 非同意			
自己開示の笑い (快感の表現)	呈示儀礼 感謝等		話題転換 謝り等			
	対目機能		対他機能			(2) 笑いの機能 (橋元)
快感の表現	感情表出 緊張開放 心理的安全弁		自己防衛的機能 自己カリカチュア 当惑の迷彩		攻撃的機能 威嚇 軽蔑	(3) 笑いの認知的メカニズム (木村)
	快感の表現		会話進行調節的 仮人称表示			
快感の表現	社会的シグ ナル・リア ティ・キャ ンセル		取り消しの笑い 謙遜表現 儀礼的同意 悲しい時の笑い		剥奪の笑い 冷笑・嘲笑	(4) 会話の組織化
	飲み笑い 挨拶の笑い		あふれ出し・ フレイムの 逆転			
	発話行為 同意・承諾					ゴフマン Jefferson
	話題転換等 会話の装置					水川・西阪

フェイスとは、状況によって定義される「プラスの社会的価値をもつ自己イメージ (image of self)」のことである。私たちは相手のフェイスを尊重し、同時に自分のフェイスを守り、そのバランスに配慮しながら相互行為を行っていると考えられる。フェイスを保持する儀礼行為には、自己のフェイスの保持を表現する「品行 demeanor」と、他者のフェイスに評価をばらう「表敬 deference」がある。さらに「表敬」は相手のフェイスに侵入しないことを示す「回避儀礼 avoidance ritual」と、他者への評価を積極的に示す「呈示儀礼 presentational ritual」に分けられる。ゴフマンのフェイス・ワークの理論の眼目は、儀礼方略を明示的に分離することではなく、むしろこれらの方略が相補的に微妙に均衡をとりあい、フェイスが保持されていく、その可変性の記述にあると考えられる。しかしながら、本稿では、笑いの方略としての特性を顕在化するため、ゴフマンの儀礼行為の概念を具体的な言語方略のレベルにおとしたブラウンとレビンソン (P. Brown & S. Levinson, 1987) の例に習い、あえて品行と表敬の方略を個々に分けられるものと措定し、次のように笑いを考えた。

①相手のフェイスを評価することを示す「呈示儀礼」に関わる笑い……相手のフェイスを積極的に評価する行為に添えられる笑い。例えば、挨拶に見られる歓びの笑い等。

②相手のフェイスを脅かさないことを示す「回避儀礼」に関わる笑い……相手のフェイスを脅かす可能性のある行為に添えられる笑い。相手のフェイスを脅かすとは、発話者側の原因で相手に物質的・精神的な負担をかけることと予測されることをいう。そのような行為に笑いを添えることで、自分に相手を脅かす意図のないことを示す。悪いニュースを伝える時の笑い等が考えられる。

③自分のフェイスを保持する「品行」に関わる笑い……自分のフェイスを脅かす可能性のある行為に添えられる笑い。自分の発話が自分のフェイスを損なう可能性のある時、自分を防御し、相手に誤解されないようにシグナルを送る。謙遜表現等の笑いが含まれよう。

先行研究で示された笑いは、概ねフェイス・ワークという枠組から分析が可能であると思われる(表1)。なお、会話の進行を調整する笑いは、自己呈示の概念とは分析のレベルが異なるという懸念が残るかもしれないが、ここでは保留し、自己呈示の笑いとして措定する。その理由は次節で述べる。

三 どのような笑いがあるかー電話会話の中の笑い

(1) 「呈示儀礼」に関わる笑い

この笑いは、発話状況での快さを表現し、相手のフェイスへの評価や連帯感を示す。相手のフェイスを積極的に評価する行為に付加されると考えられる。データでは、挨拶、同意、感謝の笑いが観察された。またジェファソン(1979)が笑いの誘いで示した反響現象も多く見られた。笑いの応酬によって相互に評価しあい交話的機能を高めていると思われる。

まず、歓びを表現する挨拶の笑いは「自分が相手を脅かさないことを示す」とも言われるが、ここでは相手のフェイスへの評価のシグナルと考えたい。

場面2 (挨拶の表現に見られる笑い) データ127

S1..もしもし

↓N2.. ああ! [笑いがかかる] 0.3]

↓S2..

わかる? [笑い(ハハハ)] 0.6]

また同様のフェイスを評価する笑いは、相手をからかう表現に見られた。からかいの表現は字義通りなら悪口になるが、笑いがつけられたため、誤解の危険性が回避され、親しさを表す表現になっている。

場面3 (からかいへの表現と応答につく笑い) データ107

↓Y1..あのお(・)いつものああ勘違いって [軽い笑い(0.7)]

↓S2..何言ってるの! [笑いがかかる=0.5]

Y3..そういうパターンならいいけど [軽い笑い(hh)=1.0]

S3.. [笑い(アハハハ)=1.0]

ジェファソン(1985)は「同じことを考えていた(thought the same thing give utterance)(Jefferson, ibid.)」という意味を笑いによる応答で示す例に触れていたが、このように単独で発話行為となる笑いもデータで観察された。データでは依頼や申し出等の先行発話に笑いが付加され、つづく隣接ペアで応答として「同意、承諾」として笑いが用いられている。この笑いは、発話状況の快さの表現で相手への評価を示し、相手を認める「同意」の発話行為となると考えられる。さらに、これは笑いの連鎖という現象、一般にあてはめることができよう。すなわち、笑いが快さの表現であるなら、笑いの連鎖が起こっている場合、後続の笑いは先行する発話への「同意・承諾」を提示するのではないだろうか。場面4は、会話を録音するので、長引かせないでほしいという依頼に対し、笑いにより同意が示される。

場面4 (同意を表現する笑い) データ153

S 1..だめだよ、長くしちゃね。あの〔笑い+／hhh〕=0.5]

↓N 1..

〔笑い(アハハハ)〕=1.0]

同意を表す言語表現に笑いが添えられる例もある。場面5では、ある研修の方法について、Sが「研修に対する非同意」を述べ、これに対してTも「研修に対する非同意」を表明している。言い換えれば、TはSに「同意」しているのである。Tの笑いは、笑いの連鎖による、呈示儀礼の笑いと解釈できよう。一方、Sの笑いは非同意の発話の効果を軽減する笑いともできるが、それではTに対するSの笑いの意図が明確ではない。Sの笑いは、あなたも同じ気持ちだろうという確認、すなわち相手を評価し、同意を誘い出す笑いとするのが妥当であろう。

場面5 (同意表現に付加される笑い) データ23

S 1..うん(・)でも疲れるねあの方法〔軽い笑い〕=0.5]

T 2..ああ、いったい何を(・)なんか先生も全然なんか〔軽い笑い〕がかかる=0.7]

場面6は感謝とその応答で用いられた笑いである。S1の感謝の笑いは、Aのフェイスを評価する笑いである。感謝に対する応答(A2)では、感謝されるほどのことをしていないという表現と笑いが示される。この笑いは、謙遜表現につき、発話の調整によって自己のフェイスを保護する笑いとすることもできるが、この場面では笑いの連鎖が見られることから、誘い出された笑いとする方が妥当である。そして、A2の笑いは、発話状況は快いことを示し、Sに対しフェイスの評価を返していると推測できる。さらにそれに同意を示す笑い(S2)が用いられ、再びSからAのフェイスへの評価が返されている。

場面6 (感謝と返答につく笑い、応答の笑い) データ170

S1…あのほんとにこの間ごちそうさまでした〔軽い笑いがかかる=0.1〕

A2…とんでもない〔笑い+h=1.0〕

S2…

〔笑い(フッフ+hh)=1.0〕

(2) 回避儀礼に関わる笑い

この笑いは、ある行為が相手に何らかの負担をかけ、相手のフェイスを脅かす可能性がある時に用いられる。好ましくない発話状況に対して、笑いで儀礼的に快さが表現され、自分に悪気はない、つまり自分の行為は相手を脅かすものではなく、好ましい状況を志向していることが伝えられる。回避儀礼に関わる笑いは、相手への非同意、依頼(場面5)、そして発話権の拒否を示す話題転換等で観察された。なお、データ収録後に観察されたため、収録できなかったが、断りや悪いニュースの伝達につく笑いもこの笑いに含まれるであろう。

場面7では、集合時間を提案するTの発話に対して、Sが不満を表明している。しかし、S1の非同意は笑いがつくことによって、自分の発話は相手のフェイスを脅かすものではない、つまり相手に強く反対するものではないという意図が伝達される。その結果、非同意という発話効果は軽減され、Tによって確認の発話効果が優先されている。そして、T2「同意」、続いてS2で「同意」が表明され、「提案―了承」という会話が構成されていく。

場面7 (相手への非同意の表現につく笑い) データ174

T1…じゃあした10時から

↓S1…えっ！10時から！〔軽い笑い(エへへ)≡0.5〕

T2…〔笑い≡0.3〕

S2… はいわかりました〔軽い笑い(hh)≡1.0〕

話題転換の際に、話者どうしが軽く笑い合う状況が見られる。会話の終了部でも、同じ場面が観察された。

場面8 (話題転換の笑い) データ15

S1…ふうん、なんかそんな感じだよ〔軽い笑い〕／／オホ+hh／／≡0.3〕

N1… 〃／／〔軽い笑い(ウホッ)≡0.2〕／／

S2… 〔軽い笑い(フォフォ+hh)≡0.4〕

ウエストとガルシア(C. West & A. Garcia, 1985)は、話題推移を可能にする長い沈黙・あいづちの交換等の会話上の手続きをあげている。しかし、串田(1994)は、好ましい話題転換についてのサククス(H. Sacks)の論議に触れながら、明らかに分断されるような話題の推移は、対話者にとって必ずしも好ましいものではないことを指摘する⁽⁹⁾。このような論議をふまえると、笑いも含め、話題転換でのシグナルの交換は、話題転換がスムーズにいかない状況、すなわち対話者どうしが発話権を譲りあう場面として考えられよう。そして、発話権取得の拒否は、相手に発話を強制するという意味で、フェイスを脅かす行為になると思われる。そこで、笑いにより自分の行為がフェイスを脅かすものではないことが表明され、対話者が好ましい状況を志向していることが確認されるのではないだろうか。場面9のSは、儀礼的同意としてあいづちをうち、発言権の取得を回避するための笑いを添えている。

場面9 (あいづちに付加される笑い) データ9

J1: ニューヨークへ行って(●)それはとっても良かったって言ってるね

↓S2: ああそう(●)へえ、いいねえ (軽い笑い(エヘヘ)≡0.2)

J3: (●)日本では年とか…離婚してるとかで肩身の狭い思いするけど、むこうでは全然ないって

また、データでは言語表現によって唐突に話題転換をおこなう場面でも、笑いが添えられていた。これも好ましくない話題転換の場面における保護措置の笑いと言えよう。

場面10 (話題転換表現に添えられる笑い) データ9

↓J1: あっ桜の木のことを聞こうと思っていたの (軽い笑がかかる+hhh≡0.7)

S2: ああ(●)桜の木ね。

(3) 品行に関わる笑い

品行は自分のフェイスを守る行為である。品行の笑いは、自分のフェイスを脅かす可能性のある行為に付加される。この笑いは二つに分けられる。一つは、驚きや謝り、謙遜表現に添えられて、発話状況が快いことを儀礼的に表現することで、自分に低い評価を与える表現(好ましくない発話状況)を調整する笑いである。もう一つは、これとは逆に、形式的には自らのフェイスを傷つける自嘲のように用いられ、自分に高い評価を与える表現を調整する照れ笑いである。

次の場面11は、Sの電話録音の承認を求める発話に対して、Jが驚きを表現している状況である。驚きは相互行為上の失策とも言えるが、品行の笑いがつくことによって、発話状況は好ましいことが儀礼的に表現され、驚きの発話効果が軽減する。笑いによって、失策を軽減し、話し手の評価を引き上げること、Jのフェイスが保護されるのである。

場面11 (驚きの表現につく笑い) データ27

S1…あの談話分析の宿題でね、電話をちょっとね、テープレコーダーにとらしてもらってるの

↓J1…

|| ええっ! ほんと! || 笑いが全体にかかる || 0.61

次の謝りの笑いは、待ち合わせの時間に遅れたような場面でも見かけられる笑いである。謝りは、自分の不始末により相手に迷惑をかけたことを認める行為なので、自らのフェイスの評価を下げる行為である。が、同時に、相手に何らかの形で迷惑をかけることで、相手のフェイスを脅かす行為になるとも言われる。ここでは、相手に重い負担をかけたような状況での謝り、すなわち自己のフェイスを省みる余裕のない状況での謝りには、笑いは付加されないことから、謝りの笑いを話し手のフェイスの防御に関わるものと判断した。笑いによって心地よい状況を志向していることを伝え、話し手の失策と話し手のフェイスを保護しようとするものである。そして、相手の承認の笑いを誘い出している。言い訳の笑いも同じ笑いである。

場面12 (謝りの表現への付加とその応答の笑い) データ87

Y1…うん。(●)全然ごっちへ入ってこないんですけど。

↓S2:..そうなんだよ〔笑い+hhh+フォフォ=0.4〕ねえ
 なんかねえ〔笑い+へへ+hh=0.5〕うんごめんごめん
 〔笑い+hhh=0.7〕

Y2:.. 〔笑い(ハハハ+hhh=0.5)〕

場面13 (言い訳の表現に付加される笑い) データ156

S1:..ずっとほっぽらかしてあるからさなんか〔笑い(フッフ)〕=0.7〕

場面14では、Tが自分の書いたレポートの内容についてSに話し、自分のレポートのアイデアは他の研究者のアイデアをまねたものであると謙遜し、Tの評価を下げる好ましくない内容が陳述されている。この笑いも、発話状況は快いことが儀礼的に表わされ、自分に低い評価を与える表現を無化し、発話効果を調整する。その結果、話し手の評価が引き上げられ、自分のフェイスが保護されるのである。そして、会話ではSの承認の発話と呈示儀礼の笑いが続いていく。

場面14 (謙譲表現とその応答につく笑い) データ18

↓T1:..なんかマネしてただけだね〔笑い(hh)〕=0.2〕

S2:..うん、でもいいじゃない〔笑い(hh+hhh)〕=0.7〕

場面15の笑いは、自分の行為を高く評価する表現に添えられる照れ笑いである。この笑いは、自嘲に近く、謙遜

表現とは逆に、自分の行為を高く評価しないことを示す防衛装置である。S1の発話は、自慢と誤解される可能性があるため、笑いによって不本意を表明し、発話の効果を減じている。ただし、この笑いは他の自己呈示の笑いとは異なり、発話状況が好ましくないとの評価を示す。しかし、笑い本来の機能は快さの表現であり、第三者に対する嘲笑等も何らかの優越感の表れと考えることができるが、自嘲という笑いはなぜ不快を表現するのだろうか。これは、先に触れた橋元(1989)の仮人称装置から考えることができる。つまり、自嘲は、何らかの優越感を感じる第三者の視点に立ち、快さを感じながら、自らを笑う行為である。その結果、笑われる自分自身に低い評価を与え、不快な発話状況を生み出すのである。そのため、対話者は儀礼的にこの笑いを承認できず、応答には儀礼的同意の笑いはない。

場面15 (自分の行為の表現への照れ笑い) データ30

S1…うん、だからそれ (*論文)読んでね、なるほどなあとか

↓ 思~~~~ったんだけど「~~~~軽い笑い+hh=1.2」

J1…

ふーん

場面16の発話者はインタビュアしたところ「普段使い慣れない言葉を使うのが気恥ずかしかった」と答えていた。照れ笑いによって、発話の価値を下げ、自分の行為への防衛措置をとっている。

場面16 (特定の言葉に付加される照れ笑い) データ162

↓S1…その(●)あの(●)上代語辞典「~~~~軽い笑い=0.2」っていうのしか調べられなかったんですけど。

四 儀礼行為としての笑い

実際の電話会話では、様々な場面で起こる笑いが観察された。本来、笑いは快さを表現するが、コンテキストの変化により、親和性を増加するという以上の多様な機能を担うものになっている。そして、コミュニケーション方略として重要な役割をはたしていることが分かる。ここでは、印象操作の方略としての自己呈示の笑いに焦点をあて、笑いを、相手のフェイスを守る「表敬」に関わる二つの笑い、すなわち呈示儀礼としての笑いと回避儀礼としての笑い、そして自分のフェイスを守る「品行」に関わる笑いの三つに分類した。

①相手のフェイスを評価することを示す「呈示儀礼」に関わる笑い……笑いによって、相手のフェイスや発話状況を積極的に評価しあい、共感を高めあう。挨拶での歓びの笑い、同意を表す笑い、感謝の笑いなどが観察された。

②相手のフェイスを脅かさないことを示す「回避儀礼」に関わる笑い……必ずしも好ましくない発話状況に対して、笑いによって、儀礼的に発話状況が快いことを示す。そして、自分の行為は相手のフェイスを脅かすものではないことを伝え、好ましくない発話状況を回避しようとする。データでは、非同意、依頼、話題転換時の笑いが見られた。

③自分のフェイスを保持する「品行」に関わる笑い……この笑いは二つに分けられる。まず、驚きや謝り、謙遜表現に添えられる笑いがある。この笑いは、発話状況が快いことを儀礼的に表現することで、自分に低い評価を与える表現（失策や謙遜表現等の好ましくない発話状況）を調整し、自分のフェイスを保護する。次に、これとは逆に、自分に高い評価を与える表現に添えられる照れ笑いは、自嘲のように自ら自分のフェイスの評価

を下げることで、フェイスを防御する笑いである。

また、データには、ジェファソン(1979)が示した笑いの誘い出し、すなわち隣接ペアにおける笑いの連鎖が見られる。ジェファソンは、笑いの誘い出しによって話題にオチがつき、話題が終了するという側面を考察しているが、ここでは儀礼行為という側面から笑いを考えてみた。

①呈示儀礼に関わる笑いの連鎖……強い反響作用を伴うことが多い。好ましい発話状況で相互に評価しあい、より好ましい発話状況が志向される。

②回避儀礼に関わる笑いの連鎖……笑いによって儀礼的な快さを示し、相手から同意の笑いを誘い出すことで、徐々に儀礼的な快さを高めていき、好ましくない発話状況を快い発話状況に移行させていく。

③品行に関わる笑いの連鎖……謙遜表現では、謙遜表現に「低い評価を調節する笑い」が添えられ、これに対する応答では、否定表現+「同意の笑い」という連鎖が見られた。謝りの表現でも「失策を保護する笑い」に対して、「承認の笑い」の応答がみられた。ただし、実際の会話では、謝りの笑いに対して、対話者が承認の笑いを返さないケースも少なくないであろう。自分の評価を減じる照れ笑いでは、対話者の応答に笑いはない。これは照れ笑いが、快さを志向する他の自己呈示の笑いとは異なり、第三者の視点から自らを笑うという形式をとるため、対話者は儀礼的に笑いで同意を示せないからである。

自己呈示の笑いに限ると、笑いの反響作用は、発話で好ましい状況が志向されていく過程で起こり、笑いの誘いに対して、呈示儀礼の笑いによって同意が示され、より好ましい状況が構成されていく装置となっていることが予測される。

さらに、笑いが添えられることにより、発話効果の選択肢が複雑になるが、話し手がこれを利用して、自分に都合の良い発話効果を優先させる状況が観察された。例えば、場面7では、笑いが添えられたS1の非同意の発話に

対して、Tは確認の発話効果を選択し、T2で同意の笑いを示す。そして、最終的にはS2の同意が誘導され、会話が構成されていく。この事実は、私たちが笑いをコミュニケーション方略として、無意識に、しかし巧妙に用いている事を示している。

場面7 (相手への非同意の表現につく笑い) データT4 選択された発話効果

T1..じゃあした10時から

提案

↓S2..えっー!10時から! (軽い笑い(エへへ)≡0.5)

確認

T3.. {笑い≡0.3}

同意

S3..はいわかりました (軽い笑い(hh)≡1.0)

同意

五 おわりに

スコーン夫妻(R.Scollon&S.Scollon,1981)の記述するアサバスカンのコミュニティや日本社会のような小集団を基盤とする社会では、人々の結びつきが緊密であるため、コミュニケーションの背景にある知識が共有される。そのため「以心伝心」といわれるようなコミュニケーション形態がとられ、言語表現によるコミュニケーションが回避されると言われる。このような場合、話し手は背景にある共有知識に依存して会話が進められるという方向で議論が進められてきたが、コミュニケーション研究では十分考察されてこなかったノンバーバルな情報が言語的な情報を代替する重要な役割を果たしているのではないだろうか。本稿では、その中の笑いをとりあげ、相互作用において、笑いが人々の関係を取り結ぶ多様な機能を担っていることを観察してきた。

それでは、私たちは言語表現のみで相互作用を遂行できるにもかかわらず、なぜフェイスワークの手段として笑いを用いなければならないのだろうか。ブラウンとレビンソン(ibid.)は、直接表現がもつとも根源的なコミュニケーション手段であると考え、直接表現以外に意図を曖昧にする言語表現を用いるのは、私たちがフェイスの脅しを強く感じるためであると述べている。こう考えると、日本社会のコミュニケーションにおける「遠慮」「察し」「非同意や断りを避ける」という方略は、相手への配慮、すなわち相手のフェイスの脅しに対する意識の強さを、「恥」や「恥ずかしい」という言葉は自分のフェイスに対する意識を含蓄していると言うことができる⁽¹⁰⁾。言語表現に対する「笑い」も、直接表現に対する「ヒントや間接表現」と同じ位相で考えることができよう。すなわち、相互作用においてフェイスの脅しを強く感じている状況では、意図を非明示的に曖昧に伝えつつ、なおかつ相手や自分のフェイスを保護する笑いが、コミュニケーション方略として重要な価値を付加されるのではないだろうか。

なお、この笑いの解釈装置の共有がまさに慣習的なものであることは、言語文化圏により笑いの意味が様々に解釈されることから明らかであろう。さらに、比較文化研究によって日本語の笑いの性質を調べ、ある種の笑いのパターンが日本語独自なものか、あるいは他にも日本語の笑いとは共通した機能をもつ文化があるのかを明らかにすることが、今後の課題である。

注

(1) 木村(1988)に詳しい。伝統的な笑い研究への批判については水川(1988)参照。

(2) 異文化コミュニケーション研究会調査(1987)データより

(3) 電話会話という性質上、ここで扱う笑いの対象は音声で表現される笑いに限定される。しかし対話者達はジェスチャー等の視覚的な要因の影響なしに、音声情報としての笑いを手がかりにコミュニケーションをおこなうため、笑いに関わる複雑な要因を排除することができ、相互作用における笑いの機能が明確になると考えられる。

① データの収集

一九八九年四月から十一月にかけて日本人同士の電話会話録(計十二時間分)を収集した。また、多様な笑いの観察を目的としたので、データにいろいろな世代が反映されるように配慮し、データの中から三〇代後半の女性と、二〇代、三〇代、四〇代、五〇代の対話相手の十例の会話(計一五〇分)を選び、四六二例の「笑いの場面」をデータとして分析した。本文で引用したデータの発話者は以下の通りである(一九八八年当時)。

S : 三十七歳女性(データNO.134,13,47,27,174,66,153,107,127,18,30,87,170,156,162,15) N : 四〇歳女性(データNO.134,153,127,15) T : 三十三歳女性(データNO.13,174,18) J : 三十七歳女性(データNO.47,27,66,30) Y : 三十五歳男性(データNO.107) A : 五〇歳女性(データNO.170)

② スクリプト

笑いのあとの〓以下の数字は笑いの続いた秒数を、／は発話の重複を、(・)はポーズを表す。Jefferson(1985)では、*heh, heh, heh, hh, uh, hnhh*と笑いが表記されているが、本稿では笑いを以下のように記した。

(A) 言語表現にかかる笑い：厳密には、笑いの音声が発話に挿入されたと考えられることでもできるが(Jefferson, 1985)、『hh』では単純に発話にかかる笑いとし、*hhhh*で示した。

(B) 音声のある笑い笑い：独自の音声としてはっきり識別できるもの。Aに付随する場合と、独自に現れる場合がある。また、強弱、出現する音声は多様であるが、ここでは、強弱については軽い笑い／笑いを区別し、音声についてはアハハ、エハハ等簡単なカタカナ表示をするにとどめた。

(C) 呼吸音・吸気音のみの笑い：一般的に会話分析では笑いを*hhh*で表記するが、無声の笑いのみを*hhh*と記述した。

(4) 「エスノメソドロジ」の無関心とは実践的活動〓行為の形式的構造についての成員の叙述に関する適切性〓妥当性・価値・重要性・必要性・実用性・成功必然的结果性への判断の全てを控えるという手続き的方針のことである(椎野, 1994)等の記述がある。無意識の次元へのアプローチという意味では、本稿も共通の立場をとるが、ここではあえて笑いの「解釈」を試みる。

(5) 谷(1986)は笑いは「仮言的「重自己性」」「齟齬した志向性をもった自己」を読みとる自己」を経験する時に起こるとしている。第三者の視点から、現前のコンテクストに不一致な判断をした自己を見て笑うという過程が指定されている。さらにゴフマンも、笑いがフレームの「ひっくり返し」*tipping*現象を起すことと言及している。

(6) Jefferson et al.(1987)参照。

O(hh)h i(h)t wa(hh)s?のように笑いの挿入が記述される。Jefferson(1979)は、会話で発話者がどのようなテクニックで聞き手から笑いを

あふれ出させるかを観察している。愉快さを表現する笑いは、発話の直後、発話者自身が笑いで誘い、聞き手が笑いでそれを受ける形で創り出されている。

Roger: You::are what dey refer to in rougher circles

as a chick'n shit. = hhh[hhehh

Ken: [heh:hehheh

西阪(1994)に愉快さを表す笑いが協働によって絶頂に達し、参与フレームが構成されていく動的な状況の記述がある。

(7)注(5)の谷と共通する視点である

(8)自己呈示と自己開示については、様々な分析視点があるが、ここではBrown&Levinson(1987)の丁寧さの理論で用いられている概念に基づいた。なお、コマン(一九六二)では、本稿では自己開示行為と考えた笑いも、印象操作のための自己呈示行為と解釈されている。

(9)串田(1994)参照。串田は「会話のトピックの多くが、現に切れ目なく推移しているに見えるだけでなく、会話はそのような推移を「望ましく」会話の構成要件と捉え、会話の際そのことに志向しあっているとも考えられる。(串田・ibid.p.119)」と述べている。

(10)笹川(1994)参照

引用文献

- Bergson,h. (1900) *Lerire. Euvres. Editiondecentenaire.*
 = (1938) 『笑ふ』 岩波文庫
- Brown,P. &S. Levinson(1987) *Politeness.* Cambridge.
- Goffman,E.(1961) *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction.* The Bobbs-Merrill Company. = 佐藤毅、折橋徹彦訳(1985) 『社会生活』 朝倉書店
- Goffman,E. (1967) *Interactional Ritual:Essays on Face to Face Behavior.* A Doubleday Anchor Original.
- 橋本良明(1992) 『笑ふのソシオリズム』 『朝倉』 VOL. 23' 大修館書店
- Jefferson,G(1979) "A Technique for Inventing Laughter and its Subsequent Acceptance Declination" In G. Psathas(ed.) 'Everyday Language Studies in Ethnomethodology.'
- Jefferson,G(1985) "An Exercise in the Transcription and Analysis of Laughter" In *Hand Book of Discourse Analysis* Vol. 3. Academic

Press.

Jefferson, G., Sacks, H., & Shegloff, E. A. (1987). "Notes on Laughter in the Pursuit of Intimacy". In Burton, G. & Lee, E. (eds.) *Talk and Social Organization. Multilingual Matters*.

木村洋二(1983)『笑いの社会学』世界思想社

串田秀也(1994)「会話におけるトピック推移の装置系」『現代社会理論研究四号』pp.119-138

水川喜文(1993)「自然言語におけるトピック転換と笑い」『シンオロコスNO.17』pp.79-91.

西阪仰(1993)「指示の透明性：参与フレームとしての対象」文部省科学研究費

研究成果報告書『微視的権力状況における会話分析』pp. 24-40.

野村雅一・岩田慶治・竹内実(1984)『ボディランゲージを読むー身ぶり空間の文化』平凡社

谷泰(1987)「会話の中の笑い」谷編『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所

笹川洋子(1994)「発語媒介行為の再考」『マス・コミュニケーション研究』pp. 58-71

Scollon, R. & S. Scollon(1981)' Narrative, Literacy and Face in Intereethnic Communication' ABLEx.

椎野信雄(1994)「エスノメンドロシー研究の方法と方針についてーラディカルな秩序現象の再特定化」『社会学評論』pp. 81-100

West, C & A. Garcia(1988)" Conversational Shift Work : A Study of Topical Transitions Between Women and Men"

Social Problems 35-5, p.551-575.